大阪支部発　時代を彩る目玉実践

荒馬で感じるおもしろさ
～“快”の海をたゆたう子どもたち～

髙田　晃二郎（ポッポ第２保育園）

１．園の概要

ポッポ第２保育園は、大阪府東大阪市にある認可保育園です。同じ法人内に以前は 0～2 歳児までの乳児園しかなく、「5 歳まで同じ保育園で過ごしたい！」という保護者の願いと職員の願いの元、皆が力を合わせ、2005 年に開設した民主園です。定員は 90 名（現在は 94 名）で、0～5 歳児までの子どもたちが生活をしています。2018 年度 5 歳児たか組は、男児：10 名、女児：10 名の計 20 名（内配慮児：1 名）のクラスとなります。

２．荒馬との出会い

私が荒馬と出会ったのはさかのぼる事 10 数年前、まだ保育士として駆け出しのころでした。短大時代の恩師が卒業生の為に今は亡きダンプ園長こと高田敏幸先生との交流の場を設けてくれたことがきっかけでした。「こんな保育士さんがおったのか！」とその会で彼の虜になってしまった私は、彼のこだわる“荒馬”なる踊りを見たいと思いビデオで見るや「かっこいい！」とまたまた虜になったのでした。そして、ダンプ園長の勤めるわらしこ保育園の卒園式にお邪魔させていただき、園児たちの踊る荒馬を見て「このかっこいい踊りを自分も子どもたちに伝えたい」と、強く思うようになったのです。始まりは「かっこいいから」と軽率な理由でしたが、ダンプ園長の講座に参加したり自分自身が踊り込む中で、「なんか面白いし楽しい！」と感じる部分や、踊りの中に込められた『人とのつながりを感じる』という部分に面白さを感じ、どんどん荒馬にのめり込んでいきました。当時勤めていた園で担任ではないクラスに荒馬を教えるという事はあったものの、自分の受け持つクラスに教えるというのは今回が初めてとなります。（2018 年執筆時）

３、子どもたちに何を伝えたいか？

取り組むにあたり、ねらいをどう持つか？踊りの持つ大切な部分（文化として受け継がれてきた、荒馬の持つ民舞としての身体技法の部分）も含め、踊っていて気持ち良い、楽しいと思う部分を自分の中で再度分析してみることにしました。

【ねらい】

・友だちを感じ、一緒に踊る楽しさを感じると共に、人と繋がる心地よさを感じる（内面的部分）

・自分の身体の使い方がわかり、身体を動かす楽しさを知りながら、しなやかな身体、姿勢制御の能力も獲得していく。

【踊りとして大切にする部分】

踊りのすべての部分で大切にすべき部分は「踏む」という部分ではないかと考えました。上半身を激しく動かすためにはそれを柔らかく支える足腰が必要になってくるし、動きの中で止まるためには「踏む」が重要になってきます。更に次の動きに移るための予備動作

（静から動に移る際のクッション的な役割）の役割もあり「踏む」なくしては踊りが成立しないという考えに至りました。ピョンピョン飛ぶのではなく、足の裏をしっかりと地面につけて自分の体重をそこにのせる感覚が「踏む」なのかなと思います。

前述した「ねらい」を大切にしつつ、子どもたちが楽しみながら自然と「踏む」を意識できるようになるためにはどのように伝えていけば良いのか、各動きの楽しい、面白いと思う部分も分析してみることにしました。

【各動きの分析】

（１）　ふりむき

早く振り返って友だちの見えるところが面白い。早く振り返るためにはしっかりと止まらないといけない。“早く”が面白いになれば自然と「踏む」につながるのではないか。

（２）　足だし

「歩いてポン」の所で、空中で足を交差させるところが面白い。降りる時に「踏む」になる。

（３）　二つとび

フワッと着地するところが気持ち良くて面白い。声に合わせて後ろに下がりながら力を溜めてその力で前に出るイメージ。

（４）　四つとび

馬を左右に振ったり上下に激しく動かすところが面白い。馬を暴れさせることを意識することで下半身は自ずとバランスを取るので、自然と「踏む」を意識できるのではないか。

そして上記に加え、

（５）　掛け声

自分の声にみんなが返してくれるところが楽しい。その心地よさをどの子もが感じられるようにする。

を大切にしながら取り組みを進めていく事にしました。

４．取り組み始めの姿

ポッポ第２保育園では、開設当初から荒馬に取り組んでおり、毎年５歳児が次年度の５歳児に荒馬を引き継いできたという文化があります。子どもたちの中にも「次は自分たちが踊れるんだ」という荒馬に対する憧れも強く、今迄荒馬を見てきたこともあり、取り組み始めからどの子もが楽しむ姿がありました。また、年間を通して取り組める保育環境もあり、子どもたちが踊る場として、夏祭り（7月）、運動会（10月）、ファミリーフェスティバル（地域のお祭り：11月）、卒園式（3月）と大きく分けて年４回みんなの前で踊ることができるので、運動会までは踊りの細かい部分はあまり意識せず“荒馬が大好き”と子どもたちが思えるように「友だちを感じる」という部分に重きを置きながら取り組むことにしました。

【教え合い、言葉と動きの関係】

まずは『友だちと踊ることが楽しい』と感じてほしいと思い二人組にこだわり取り組んでいきました。そして行事前にはペアを固定し教え合っていきました。この“教える”という部分も、大人がただ教えるのではなく、子どもが主体的に教え合える、気付き合えるように、子どもの姿、言葉を拾いそれを全体に返していきながら進めていきました。

（１）　ふりむき

まず取り組んだのがこの動き。みんな楽しんではいるものの止まって振り返るところが難しく身体が流れていってしまう姿がありました。「早く振り返って友だちの顔見えたら面白いで～」と伝えてはいたのですが（どこまで伝えるかは悩みどころですが）止まれないと振り返れない。はじめは「こん　にち　は（振り返る）　さよ　おな　ら」の４拍子にあわせて振り返っていたのですがこれでは子

どもがわかりにくいことが見えてきました。そこで以前ダンプ園長の講座で学んでいた、「フワッ、フワッ、フワッ（グッと止まる）シュワ！」に合わせてしてみることに。この言葉に変えたことで少しずつ子どもたちの動きにも変化が出てきました。そこから更にシュワの部分が半拍早い言葉、つまり 3.5 拍子でしてみることにしました。すると 0.5 拍子早く振り返ることで、“早く”の意識も高まり必然的に“止まる”にもつながっていったのでした。そして、ピタッと止まれるペアの姿を全体に返しながら「しっかり友だちの目見てて楽しそうやろ」と言葉を添えていくと、また子どもたちの動きも変わっていきました。しかし、まだまだボディーイメージを持ちにくい子も多く、更にペアで友だちの姿をみあいながら練習もしていき、気になる子は個別にも声を掛けていく事にしました。なかなか自分から友だちの姿を言いにくい姿がありましたが大人が「どう？」と声を掛けることで「むこうまでいきすぎて、戻ってくるの時間かかってるよ、行き過ぎてるから（合わせるの）大変」と友だちに伝え、そのことで自分の姿に気付いていく姿が出てきたり、中には相手に対して「かっこよくないから楽しくない！」と怒り出
すペアも。そんな時は大人が間に入りながら相手の思いも聞きながら（この時は「むずかしいからわからない」でした）仲立ちになることで「じゃあ、スキップみたいにしたらええねん」と丁寧に教える姿が出てきました。

自分を出しながら、荒馬を通して、自分だけでなく“ペアの子が上手くなってくれて嬉しい”という気持ちも育ってくれればと思っていました。

（２） 二つとび

この動きに入る以前から“足じゃんけん”を子どもたちと楽しんでいました。足だしの初めの部分がこのあそびの“チョキ”にあたります。はじめに大人の動きを見せ「足どうなってる？」と聞くと「チョキなってる！」と気付かせていく事で子どもたちもイメージが持ちやすかったようでスムーズに動きが入っていきました。また“ポン”の部分を子どもたちに聞くと「空歩いてるみたい」と返ってきたり、友だちと馬を合わせる部分では「荒馬結婚や～」と子どもが命名したりする姿も。子どもから出た言葉で取り組んでいく事で子どももイメージがしやすかったようです。更にグッと馬を引いて踏む部分では「後ろに力ためてその力で前に出るんだよ～」と言葉で伝える事に加え「こんにゃろめ」（こちらも前述のダンプ園長の講座から）という言葉に合わせて踊る事を伝えると、この言葉が子どもにとっては動きもイメージしやすく言葉の響きも面白かったようでした。

この頃もまだまだ自分の身体がどうなっているかわからない子がいましたが（本来は片足で踏むが、足が揃った状態でジャンプしていたり）グループで教え合ったり、ペアの子に教えてもらう事でわかっていく姿が出てきたり、どの子も荒馬に対してかまえることなく楽しみながら「うまくなる自分」に自信も付けてきていました。

（３） 四つとび

クルッと振り返る部分は、夏のプールの準備体操の際、まねっこあそびの要素も取り入れこの部分の動きも入れていきました。このこともあってか、四つとびでは自然と振り返っていた子どもたちでした。動きの部分では「馬を暴れさせてあげるねんで～」とだけ伝え、後は友だちの姿を全体に返していきました。

その他には“あゆみ”（入場、退場）の所では「馬に命入れてあげるねんで～」と伝えていく事で「馬をしっかり上下に振る」という事がわかり意識していた子どもたちでした。運動会までの取り組み（前半）を通し、子ど

もがわかることばで動きを伝えていく事で、子どもたちの動きが変わる事。また、声を出しながら踊ることで自分の身体をどう動かせばよいのかがイメージしやすく、踊りやすさ、楽しさにもつながっていく事がわかってきました。

５．後半に向けて、楽しさの再認識

夏祭りでは“ふりむき”まで、運動会では四つとびまでを取り組みました。運動会で「荒馬を見せたい」と自分たちで決める等、踊ることが楽しくなっていた子どもたちの姿がありました。そして後半に向けもっと楽しくなってほしいと思い、各動きの楽しい部分や細かな動きの部分を改めて押さえていく事にしました。

（ふりむき）

向き合ったペアの間に顔が隠れるぐらいの紙を用意。声に合わせて紙を引き抜く。早いバージョン、遅いバージョンでどちらが面白いか聞いていく（全員ペア早いバージョンでした）。⇒早く振り返るを意識できるように

（四つとび）

あげた足を前に出し、二つとびで溜めた力で前に進む事と（反対の足を上げる子が多かったので）、もっと馬を暴れさせる事で楽しくなる事を伝える。⇒自然な身体の流れを意識できるように。

荒馬は四つとびまでは、すべてが「右始まり」になっています（どこまでで動きを区切るかにもよりますが）。前半は少しだけ右始まりを意識させていました。後半改めて押さえようと思い右を意識できるよう声を掛けていきましたが、これがなかなか入りにくく、子どもには難しい。向かい合わせになると鏡になり尚わかりにくい。踊りを楽しむために必要なのか？重心を下げて「踏む」につなげるのであれば右も左も関係ないのではという考えに至りました。

私自身「右始まり」の意図が見いだせず、「身体の動きとして右始まりが自然ならば、踊り込むことで自然と右始まりになっていくのでは？」と淡い期待も持ちつつ、子どもたちの様子も考慮し、今回は左右を意識せずに取り組むことにしました。(指導するかしないかでは悩むところです)

【子どもたちの変化、ペア決め、荒馬リーダー決め】

まずは友だちと踊ることを楽しんでほしいと、ペアにこだわり 11 月までは取り組んでいました。ペアの作り方も子どもたちで決めさせていたのですが、7 月の一回目には「何となく近くの子とペアに」という姿。

そして 10 月の二回目は前日に「誰としたいか考えといてね」と伝えておきました。もっと「この子と踊りたい！」という強い思いをもってペアを決めて欲しいという思いと、なりたい子が被った時にも自分の思いをしっかり出して欲しいと考えたからです。しかしこの時も「〇〇ちゃんとしたかったけど、もう決まってたから」という姿が。早いもの勝ちではなくちゃんとそれぞれが納得して決めて欲しいなと思っていたのですがそうもならず。ペアになったらなったで楽しむ姿はあるものの「気持ちを出し切れていないのでは？」という姿の子どもたちでした。しかし 11 月の三回目では今までと違い（大人の後押しも少しありましたが）したいと思う子が被ってもそこから話をはじめ譲り合う姿等が出てきました。これは踊り込む中で「誰と踊っても楽しい」という風に子どもたちが思えるようになってきているからなのではないかと感じていました。そしてもう一つ子どもたちと決めていった事が「よういはいいか～」を言う子です（のちに荒馬リーダーと命名）。一回目は大人が決めたのですが、後は子どもたちが話し合い決めていきました。はじめは大人が入っていたこの話し合いも会を重ねるごとに、お互いの思いを聞いたり、強い意見に流される

のではなく自分の意見をしっかり言えるようになってきたり、最終的にはほぼ大人が入らずとも自分たちで納得したうえで決める姿に集団としても変わっていきました。荒馬が好きになり「自分たちの荒馬」という思いも強くなっていたのではないかと思います。

【卒園式～メンバーチェンジを通して～】

ペアで踊ることを十分に楽しめていると感じ、卒園式では全体で踊る部分とグループで構成も考え踊る部分を作ろうと考えました。そして、新たに全体での“四つとびのメンバーチェンジ”も子どもたちに伝えました。するとさっとペアを見つけ違う子と踊る姿があり、子どもたちも楽しそう。これも卒園式でしたいと考えていたのですが、練習を重ねるうちにペアになれない子の姿がでてきたのです。一回目は動きの目新しさからすぐペアになっていた子どもたちでしたが、回を重ねることで「あの子と踊りたい」という気持ちが強くなり、フラフラとしているＲを避けるようになってきたのです。Ｒ自身も自分から「やろう」と言わない姿がありペアを見つけられないという状態になっていったのでした。この姿から集団の姿やＲへの関わりも含め私自身のこれまでの保育について大反省したのでした。

※卒園式の絵（荒馬の好きなところ）
（左）二つとび：すぐひっぱって、フワッていくとこが好き。あとメンバーチェンジも好き。（右）二つとび：はなれて、（友だちが）またちっちゃく見えてまたおっきく見えるのが面白い。メンバーチェンジも好き。チュッとするやろ、結婚してるみたいで好き。

【Ｋにとっての荒馬は？】

配慮児のＫ、春先は荒馬をつけることも嫌がっていましたが、少しずつ荒馬に参加していく事でつける事も嫌がらなくなり、踊りにもＫのペースで参加するようになりました。また家では「ラッセラーラッセラー」と言っている姿があると聞き、好きになってきてくれているのかなと感じていました。なかなか自分から友だちと繋がりにくいＫだからこそ、友だちからＫに向かってきてくれる経験（友だちと繋がる楽しさ）が大切なのではないかと考え、卒園式では最後の円になるところでＫを真ん中にした構成をすることにしました。しかし振り返ってみると年間を通しての取り組み方としてどうだったのか？Ｋにとって荒馬がもっと楽しいものなるように大人が関われたのではないか？子どもたちの中でもっとＫの事を考えられたのではないかと思うところが多く、反省する点でもあります。

（左）Ｋの描いた荒馬（右）Ｒの絵：よつとび：わっせっせ（四つとびの掛け声）が一番大きい声出せるから。大きい声出すと楽しい。

６．おわりに～なぜ荒馬なのか～

年間を通して取り組んできた荒馬。どの子もがそれぞれ楽しさを感じ、荒馬を好きになってくれたのではないかと思います。では荒馬の魅力とはなんなのか？私自身が感じたことは、まず、踊りの型はあるが、型に縛られず踊れるという事。つまり多少間違えても踊り全体の流れの中で気にせず踊っていける事が(「できる･できない」に囚われることなく）子どもたちの好きになる理由なのではないかと考えます。そして、その流れの中で、自分

自身を出して誰にも否定されることなく全身を使い“自分を表現できる心地よさ”（自己肯定感）を感じられることに加え、友だちがいるから踊れる、本気を出した自分を友だちが受け止めてくれる心地よさを感じられること、そしてその“快”のあふれる空間の中を友だちと一緒にいるからこそ、友だちとのつながりをより強く心地よいものに感じられるのではないでしょうか。

踊り自体が持つ身体操作の気持ち良さに加え、人とのつながりの中で様々な“快”がいたるところにちりばめられており、その様々な“快”の溢れる海の中を友だちと共にたゆたえることが、「なんかわかんないけど楽しいし気持ち良い」という子どもたちの感覚に響き、荒馬の楽しさにつながるのではないかと思います。人として大切にしたい部分、“豊かに生きる”という感覚を幼児期の子どもたちに伝えるという点で荒馬は非常に優れたものであると共に、「5歳だから」と一足飛びにできるものではなく、乳児期からのつながりあそびや感覚あそびを楽しみ、荒馬を楽しめる土台の積み重ねも非常に大切なことだと感じます。